



# 聴覚障害児の漢字の読み書き習得度と影響要因に関する研究

|        |                                                                                       |
|--------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 著者     | 茂木 成友                                                                                 |
| 発行年    | 2015                                                                                  |
| 学位授与大学 | 筑波大学 (University of Tsukuba)                                                          |
| 学位授与年度 | 2014                                                                                  |
| 報告番号   | 12102甲第7387号                                                                          |
| URL    | <a href="http://hdl.handle.net/2241/00126122">http://hdl.handle.net/2241/00126122</a> |

|         |                             |           |      |  |
|---------|-----------------------------|-----------|------|--|
| 氏名（本籍）  | 茂木成友                        |           |      |  |
| 学位の種類   | 博士（障害科学）                    |           |      |  |
| 学位記番号   | 博甲第                         | 7387      | 号    |  |
| 学位授与年月  | 平成 27 年 3 月 25 日            |           |      |  |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当                |           |      |  |
| 審査研究科   | 人間総合科学研究科                   |           |      |  |
| 学位論文題目  | 聴覚障害児の漢字の読み書き習得度と影響要因に関する研究 |           |      |  |
| 主査      | 筑波大学教授                      | 博士（心身障害学） | 四日市章 |  |
| 副査      | 筑波大学教授                      | 博士（教育学）   | 鄭 仁豪 |  |
| 副査      | 筑波大学教授                      | 博士（心理学）   | 大六一志 |  |
| 副査      | 筑波大学教授                      | 博士（教育学）   | 茂呂雄二 |  |
| 副査      | 筑波大学准教授                     | 教育学博士     | 加藤靖佳 |  |

## 論文の内容の要旨

### （目的）

情報通信機器の発展、普及に伴って、書きことばの使用、とりわけ漢字の使用が重要となっている。健聴児における漢字の読み書きに関する研究は数多く行われ、漢字の読み書き習得の特徴として、小学校4年生頃から漢字の読みの達成度と書きの達成度に差がみられ、読みの達成度の方が高いこと、同音異漢字との混用が多いことなど、種々の知見が得られている。さらに、読み習得に関連する漢字要因として、使用頻度、漢字が表すことばの意味の抽象性、漢字の読み方の多様さ、画数の多さが示され、書き習得に関連する漢字要因として、画数の多さが挙げられている。また、漢字の読み書き習得に関連する個人要因として、語彙の量が影響しているほか、漢字の書き習得には視覚情報処理能力が影響していることも明らかにされている。

一方で、聴覚障害児における漢字の読み書き習得については、指導実践などに関する断片的な報告はみられるものの、漢字の読み書き習得の特徴について系統的な検討はなされていない。さらに、聴覚障害者自身からも、漢字の熟語や固有名詞の適切な読み方が分からず、就業上、パソコン等の利用に困難があることなどが指摘されている。このような背景から、聴覚障害児に対する漢字の読み書きに関する適切な指導法を明らかにすることは、日本語の指導の点からも重要な課題であると考えられる。本研究では、そのための基礎的な段階として、まず、聴覚障害児の漢字の読み書きの達成度、ならびに漢字の読み書き習得の特徴を体系的に明らかにし、さらに、漢字の読み習得に影響を及ぼす漢字要因と個人要因とを明らかにする。これらを通して、聴覚障害児の漢字指導への示唆を得ることを目的とする。

### （方法）

まず、聴覚障害児における漢字の読み書き習得の特徴について検討するために、小学校段階で学習

する漢字を用いた2種類の調査を行った。1つは、特別支援学校（聴覚障害）33校の小学部第2学年から中学部第1学年に在籍する聴覚障害児640名を対象として、漢字の読み書き習得の状況を調査した（研究1）。出題する漢字は既習の漢字とし、また、出題する漢字数は各学年で学習する漢字の約6割とした。もう1つは、特別支援学校（聴覚障害）1校の小学部第2学年、第4学年、第6学年に在籍する19名を対象として、漢字の読み書き習得に影響を及ぼす漢字要因と個人要因を探索的に検討した（研究2）。

次に、聴覚障害児における漢字の読み習得に影響を及ぼす漢字要因と個人要因について検討するため2つの実験を行った。1つは、特別支援学校（聴覚障害）1校の中学部第1学年から第3学年に在籍する聴覚障害児41名および同学年の健聴児96名を対象として、読み習得に影響を及ぼす漢字要因を検討した（研究3）。漢字要因として画数（字形的側面）、心像性（漢字が表すことばの意味の抽象性）、一貫性（漢字が持つ読み方の多様さ）を指標として、漢字二字熟語180語からなるテストを作成、実施した。もう1つは、特別支援学校（聴覚障害）1校の中学部第1学年から第3学年の聴覚障害児32名を対象として、読み習得に影響を及ぼす個人要因を検討した（研究4）。個人要因として、字形処理、意味処理、そして音韻処理に関する側面からそれぞれ検討した。

### （結果と考察）

研究1の結果から、聴覚障害児、健聴児とも、漢字の読み書き習得では同様の傾向がみられた。両対象児群とも、漢字の読み習得では、どの学年も90%以上の平均正答率を示したが、書き習得では、1年生で学習する漢字において平均正答率90%以上を示したものの、学年上昇に伴って、漸次低下していくことが明らかになった。さらに、読みと書きの達成度を比較すると、小学校4年生頃からその差が広がっていくことが明らかになり、達成度においては、聴覚障害児と健聴児との共通点が数多く確認された。

しかしながら、漢字の読み書き習得で健聴児とは異なる点もいくつかみられた。まず、漢字の読みの達成度については、全ての学年において、聴覚障害児が健聴児よりも有意に低い正答率を示した。また、誤答傾向についてみると、聴覚障害児は漢字の読みにおいて「不正確表記」を多く示した。これは、仮名单語の綴りでも多くみられた特徴であり、漢字の読みにおいても同様の特徴が示された。また、漢字の書き習得については、健聴児と同程度の達成度ではあったものの、誤答傾向から、聴覚障害児の語彙量の少なさや統語的な能力の低さによる影響が推察された。

研究2では小学校段階の聴覚障害児を対象に、漢字の読み書き習得に影響を及ぼす漢字要因と個人要因について検討を行い、聴覚障害児と健聴児の間で、漢字の読み書き習得に差を生じさせる要因を探索的に検討した。その結果、聴覚障害児における漢字の読み習得に影響を及ぼす漢字要因として、ひとつの漢字の読み方の種類の多さ、漢字が表すことばの抽象性が挙げられた。また、漢字の書き習得に影響を及ぼす漢字要因として、画数の多さが挙げられた。これらの結果については、健聴児を対象とした先行研究においても同様に指摘されていることから、聴覚障害児と健聴児の間で、漢字の読み書き習得に影響を及ぼす漢字要因の種類は同様であることが示唆された。しかし、研究1では、読みの達成度や読み書きの誤答傾向にちがいがみられたことから、影響を及ぼす漢字要因の種類は同様であるものの、各要因が与える影響度が聴覚障害児と健聴児とは異なる可能性が考えられた。また、漢字の読み書き習得に影響を及ぼす個人要因を検討したところ、漢字の読み書きの達成度と言語力との間に有意な相関がみられた。このことから、漢字の読み書き習得には、言語力の影響が大きいことが示唆された。

研究3では、聴覚障害児は健聴児に比べて漢字の読み習得に困難を示すこと（研究1）、漢字の読み

習得に関連する漢字要因の種類は聴覚障害児と健聴児で同様であるが、その影響度が異なる可能性が考えられたこと（研究2）などから、漢字の読み習得に影響を及ぼす漢字要因について、より詳細に検討した。漢字要因として、画数、漢字が表すことばの抽象性を表す心像性、漢字が持つ読み方の多様性を表す一貫性を指標として検討した結果、聴覚障害児は、健聴児に比べて、一貫性の影響を強く受けることが明らかになった。すなわち、一貫性が高い漢字（読み方の種類が少ない漢字）では、聴覚障害児と健聴児との間に正答率での差がみられなかったが、一貫性が低い漢字では、聴覚障害児は健聴児に比べて正答率が低かった。したがって、聴覚障害児は漢字の読み習得において、読み方の多様さの影響によって健聴児よりも達成度が低くなることが示された。

研究4では、漢字の読み習得に関連する個人要因（研究2）について、より詳細な検討を加えた。研究3で用いた漢字の読みのテストの成績を従属変数、学年を統制変数、字形処理、意味処理、音韻処理の3要因を独立変数とするカテゴリカル回帰分析を行ったところ、漢字の読みの達成度に有意な影響を与える要因として、語彙力（意味処理に関連する検査）、発語明瞭度（音韻処理に関連する検査）が挙げられた。どちらも漢字の読みの達成度に対して正の有意な影響が確認され、語彙力が高い、あるいは発語明瞭度が高い生徒の場合に、漢字の読みの達成度が高くなることが示された。語彙力の高い生徒の場合、その漢字が表すことばの意味をよく理解しており、それが適切な読み方に繋がったと考えられた。このような特徴は、健聴児においても指摘されており、健聴児と同様の個人要因の影響が確認された。また、発語明瞭度の高さは、聴覚障害児の音韻獲得の正確さに対応していると考えられ、音韻を正確に獲得している生徒は、仮名綴りにおける誤りも少なく、濁点や特殊音の綴りの誤りが少ないことが知られている。そのため、本研究においても、発語明瞭度が高い聴覚障害児が、正しい読み方を正確に筆記することが出来たと考えられた。

本研究の結果から、聴覚障害児は漢字の読み書きのうち、特に読みの習得に困難を抱えていることが明らかになり、その要因として、漢字要因では漢字が持つ読み方の多様さ、個人要因では語彙量と発語明瞭度の高さが挙げられた。従って、聴覚障害児における漢字の読み指導では、正確な音韻を獲得させること、また、ことばの意味や広がりといった語彙の指導と関連付け、ことばの学習として総合的な観点から行うことが重要であると考えられた。

最後に、本研究の課題として聴覚障害児における漢字の読みや書きの習得に関連する、より多くの漢字要因や個人要因について、また、より多様な能力の対象児にについて検討することによって、聴覚障害児者の漢字の読み書き能力を向上させるための、より幅広く柔軟な支援・指導方法を提示していくことが可能となると考えられる。

## 審査の結果の要旨

### （批評）

本研究は、系統的な研究が十分に行われていない重度聴覚障害児の漢字習得について実態と困難要因を明らかにしようとするものである。まず、漢字習得の実態について、全国を視野に入れた幅広い調査により、聴覚障害児は健聴児と比べて漢字の書きについては大きな遅れはないが、読みにおいては到達レベルそのものは低くないが、健聴児に比べて習得レベルが低いことを明らかにした。さらに、漢字の読み困難をもたらす要因について、漢字の字形、音韻、意味といった漢字そのもののものつ要因、また、

視覚的認知能力、聴力、発話能力、言語能力といった、聴覚障害児の心理・言語的要因を統制した詳細な検討により、聴覚障害児は特殊な音を含む漢字の読みや、読み方が多様な漢字の習得に困難をもつことが明らかになった。また、誤答分析からは、ことばの意味の広がりに関連した多様な誤りが生じ難いことも示され、このことから、彼らの個人的な要因である発話能力や言語能力との関連が示唆された。これらの知見をもとに、漢字の学習は、一般に行われているようなドリル学習だけでなく、漢字のもつ意味の相互関連や読み方の多様さと関連づけた指導が望ましいことを示唆した。

重度聴覚障害児の漢字習得の実態把握や要因分析に用いた対象児の数、検討した要因の種類といった点で、さらに広範囲の調査・検討と、それに基づく本研究での知見の確認が必要だと思われるが、これまで断片的に取り組まれてきた漢字習得の課題を総合的に幅広く捉え、漢字習得の要因について、条件を統制して詳細に検討した点、また、漢字の指導への示唆を与えた点は高く評価される。

平成 27 年 1 月 9 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（障害科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。